—北海道—

野鳥だより

第　6　号

編集者　北海道野鳥愛護会
発行者　北海道国土緑化推進委員会
発行日　昭和46年5月発行
5月・8月・11月・2月　年4回発行

愛鳥週間の起源

——野鳥保護とは何か——

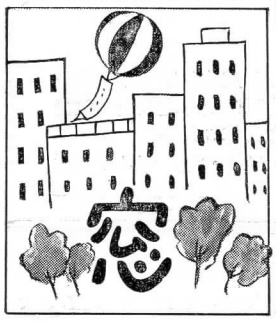
野鳥保護運動が社会思想となつたのはアメリカが古く一七〇〇年代といわれている。ジェームス・オージュボンという愛鳥家が、生涯を鳥類保護事業に捧げ、この人を記念して「オージュボン協会」が設立され、バード・デー（愛鳥日）が創設された。

日本では昭和二十一年の秋頃から、連合軍総司令部天然資源局野外生物科長として駐留していたアメリカの応用動物学者オリバー・L・オースチン博士らの提唱で、文部省、農林省、日本鳥学会、野鳥保護団体等の関係者が相はからい、国民全体へ野鳥保護思想を普及する目的で、昭和二十二年四月十日第一回のバード・デーを発足させた。

北海道だけは季節の関係もあり、五月二十日に設けられたが、昭和二十四年には全国統一して五月十日とし、翌二十五年からは週間となり十日から十六日までの行事となつた。

野鳥保護の本質は自然保護である。地球上の生物として、人間と野生鳥獣を対比した場合、それは全く共通の広場に立つている。鳥獣の住めない環境とは、自然が破壊された状態をあらわし、自然の破壊された地上とは、人間の生存を拒否する環境に通ずる。緑を保全することも大気を浄化することも、農薬の汚染を防止することも、人間の生存を全うすることであると同時に、野生鳥獣の保護に通じているのである。

（春を待つビンズイ・小樽市天狗山麓にて、渡辺俊夫さん撮影）



緑の自然で野鳥に親しむ

── 自然の恩恵に応えよう ──

■ 野鳥を自然に返そう

若葉の季節、5月10日から1週間、全国一斉に愛鳥週間を迎える。昭和22年、荒廃した国土に緑の自然と野趣あふれる野鳥の姿を求めて、ささやかな出発だったこの週間も、全国に各種の野鳥保護団体が結成され、自然と野鳥の結びつきが認識されるにともなって、広く浸透しつつある。野鳥類は自然の調和物として、農林業における害虫獣の天敵の作用や、また生活環境を維持するうえで欠かせない存在となっている。

本年の週間を迎えるにあたって、「緑の自然で野鳥に親しもう」のテーマが設定された。この趣旨は、陽光うららかな春の野山で、大いに野鳥の声や姿にひたりながら、自然を満喫しようというフレッシュなものだが、このテーマのかげには、重要な意味が含まれている。

その意味とは、野鳥を籠の中に入れて飼う悪習を打破しようということである。野鳥を捕獲するためには、いかなる場合でも農林大臣、または知事の許可が必要であり、許可を受けて捕獲した野鳥を飼うためにも知事の飼養許可が必要である。しかもこの許可は最近殆んどなされていない。にもかかわらず、本道でも500件を越える許可鳥が存在し、実質には数万羽が飼われていると想定される。正式なルールとしては、昭和25年法律改正以前から引続いて飼っている野鳥の許可しか存在しないから現在飼っている野鳥は、密猟されたものか、25年以前に許可を受けた2代目、3代目の身代り鳥で、そのいずれもが、全くの不法飼育である。

野生の鳥を鳥籠の中にとじこめ、その自由をそくばくして野鳥にしあわせのあろうはずがない。したがって、法律上のぬけがけはともかく、野鳥を自然に返し、自然のままに野鳥に親しむ運動を展開することが今週の主要なテーマなのである。

■ ガン類の捕獲禁止へ

ガン類は狩猟鳥最大の野鳥であり、その肉も美味なことから、猟趣のうえでは貴重な存在であった。したがって、とくに渡り鳥の狩猟地である本道とか宮城県では狩猟者の反対が強く、狩猟鳥から保護鳥への改正が困難であったといわれ、本道の野鳥保護団体としては、誠に不名誉なことであった。

こうした動きとともに、渡り鳥の保護運動もにわかに高まっている。広島県では湾内の水鳥を捕獲禁止するための措置を講じており、ビワ湖の狩猟禁止も話題にのぼっている。本道では、風蓮湖の全面狩猟禁止や、湧洞沼の鳥獣保護区への移行が、地元の人々から要請されている。

ついこの2・3年前までは、狩猟優先がとなえられた自然界に、保護論が堂々とまかり通ってきたのである。人間を生み、育ててくれた恩恵ある自然を、やみくもに破壊してよかろうはずがない。

こうした鳥獣保護の急激な進展は、狩猟者として納得のできない措置かもしれない。しかし、すでに自然の山野を対象に獲物を追いかける狩猟は失われつつあり管理された狩猟、云いかえれば、定められた地域（猟区）で放鳥されたゲームを捕獲するという近代狩猟に脱皮すべき時期に来ているといえよう。

■ 野鳥誘致に開眼しよう

東京上野の不忍池には、数千羽の野生のカモが浮んでおそれ気もなく人に近づいてくる。上野動物園が、長年の給餌で馴れさせたものである。野生の鳥獣は、人間が危害を与えないと知れば、いつでも人に近づいてくるのである。

先日、ニユージランドの鳥学者、ウエスター・スコーブ氏の来訪を受けたが、道庁の前庭の池に、カモが浮んでいないことを不思議だとしての質問があった。諸外国では、この程度の池にどんどん渡り鳥が入るのだという。

日本人の精神文化の貧しさをいやというほど思い知らされた。今からでも遅くはない。札幌の中島公園の池に数千羽の渡り鳥が入ることも、施策の講じ方によっては夢ではない。そんな運動を、わが野鳥愛護会としても着実に進めてゆきたいものである。（安田鎮雄）

白鳥の助走についての調査

網走市　玉　田　　誠

白鳥が飛び立つときは、一般に見なれている野鳥の飛び立ちとは異なり、かならず助走します。風かみに向うのが普通ですが、時と場合によっては、風向きとは関係なく助走します。雪面に残された助走の足跡の計測から子供たちと実施した研究の結果を、次のように報告いたします。

① 助走がほぼ直線的に行なわれている場合と、左右のどちらかに湾曲している場合とがあります。
前者の場合は、助走距離はもちろん長短種々あり、長いものは無風時のときで*24.7m*。歩数*24*歩が最高です
後者の場合は、助走距離が中位のものが多いことから都合よって助走を開始したが、
ⓐ 風が斜めに当ることから、正面から風が当るように助走方向を修正したか
ⓑ 横風を受けて、少しづつ流されて湾曲したのか、のどちらかであろうと考えられます。

② 足跡の間隔に広狭があり一定していません。
このことは、翼の運動と関係があるものと考えられます。すなわち、翼が打ちおろされた時には浮力が大きくなり、体が浮いて歩巾が広がり、翼が引き上げられたときには浮力が小さくなり、歩巾が前者より狭くなるものと考えられます。

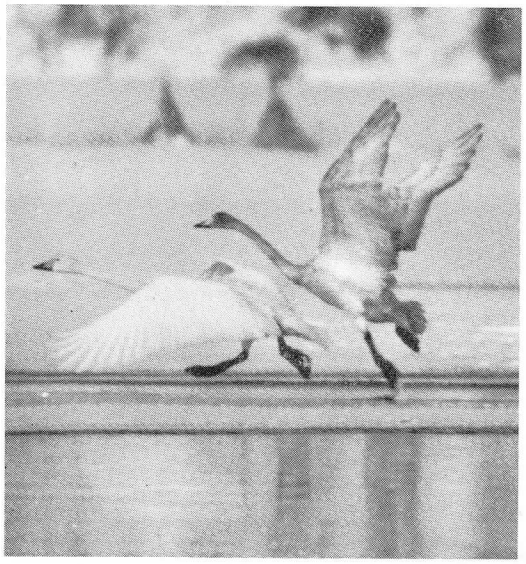
③ 雪面をけった最終の足跡が、右足の場合と、左足の場合とがあります。
走り巾とびや、走り高とびの場合、右足で踏み切る者と左足で踏み切る者があるように、白鳥にもきき足が右と左のがいるのでしょうか。前者をW型、後者をe型としておきます。

④ 最終の歩巾が、その一つ前の歩巾より広い場合と、狭い場合があります。前者は翼を打ち下したときの離昇と思われ（W型）、後者は翼を引き上げたときの離昇（N型）と考えられます。

⑤ 上記の③と④とから、白鳥が離昇するときには、WW型、We型、NW型、Ne型の*4*つの組み合わせが考えられ、これを「離昇型」と仮称していますが、成鳥と幼鳥の別、助走の直線型、曲線型の違いなどの関連性を見出すことはできません。

⑥ 歩巾は広狭を繰りかえしつつ、その各々が次第に広くなってゆきます。このことは、助走及び翼の推力による加速を意味するものでしょう。

⑦ 時には助走の開始が、水面から行なわれたと判断できる足跡も見られます。
トーフツ湖の初春の開水域の水位は、潮汐の影響を受けて、水面と氷岸との間に、*10*〜*20m*も段差ができますから、水面から氷上の雪面への助走は、満潮時に行なわれたものと考えられます。
最後に計測値を参考まで載せます。



年・月・日	計測者（生徒名）	助走距離（m）	歩巾（m） 最終-1	歩巾（m） 最終	歩数	最終足跡	成幼別	離昇型	備考
1969 Feb.22	狩　野	9.7	1.6	1.0	10	右	幼	Nw	水面から
1970 Jan.29	大　友 石　井	24.7	1.7	2.1	24	左	成	We	
1970 Feb.28	畑　山	21.3	1.5	1.3	23	左	幼	Ne	
1970 Mar.3	狩　野 日下部	23.7	2.0	1.5	24	左	成	Ne	
1971 Feb.16	日下部	17.8	1.5	1.0	20	左	成	Ne	
1971 Mar.3	新　沼 日下部	19.0	1.2	1.6	22	右	幼	Ww	

（網走市立北浜中学校）

早春のウトナイ湖で探鳥会

小笠原　照子

3月28日、早春のウトナイ湖の探鳥会に出かけました。

風は少し冷たかったが、参加者約40人。札幌を7時15分のバスで発ち、1時間半でウトナイ湖畔に着きます。早春とはいえ、いつもの季節ですと、吹雪も舞いかねない時候ですが、ぽかぽかと小春日和のような1日でした。

遠く厚真町から駈けつけた梅木さんが、「ガンが100羽も入っていますよ」と、はずんだ声で迎えてくれます。

ウトナイ観光ホテル側の岸から、思い思いの場所に陣取って、双眼鏡をのぞく者、プロミナも林立します。

愛護会の探鳥会が開かれるようになって、どんどん双眼鏡とプロミナが普及し、それも圧倒的にニコンが多いのにはびっくりです。

結氷していた厳寒期には、本州へでも避難していたのでしょうか、女王の姿にふさわしいオオハクチョウの純白の姿が目をとらえます。白鳥は湖面一杯に広がるようにその数約500羽。

よく見ますと、両親と子供、あるいは親族一家か、小さなグループが固まり合って、一大集団となり、それが湖面のあちこちに点在しているのです。シベリアへの長途の旅をひかえ、心身をいたわるのに余念がないようでした。はじめて白鳥の群れを見るという会員の方もいていかに平素は野鳥に関心がなかったのか、また愛護会の行事に意義があるのかを、あらためて深く考えさせられます。

対岸は湿地帯となっていて、人が殆んど近づかないためか、ヒシクイの群れが100羽ばかり、岸の氷の上に並んでいます。それをとりまくように、おびただしいカモの群れ。ヒドリ、ホオジロ、オナガ、マガモとのことでした。

それらの群をじっとにらんで、樹上にオジロワシが2羽。みじろぎもしません。オジロワシは北側の結氷の上にも2羽見えましたから、合計4羽もいて、これは珍らしいとのことでした。

やがて、湖畔を北側に向って歩きましたが、ハクセキレイ、マヒワ、カワラヒワが、群れになって目を楽しませてくれます。もうアオサギも渡って来て湖面の中央部の流木の上にたたずんでいます。

そのとき、素晴らしい空中戦を見ました。ミサゴが魚をつかんでとび上がるのを、すばやくオジロワシが追いかけ、あわてたミサゴが、空中にほうり出した魚を、オジロワシが、あっという間に拾いとったのです。それは瞬間のできごとでしたが、みんなが声を呑んで見ていました。この自然の素晴らしいできごとを、フイルムにでも収めてすべての人々に見ていただきたいような気持ちでした。

そんなとき、湖上を大きくはばたいてマガンが15羽、北の方へ編隊で飛び去りました。そのほかツルシギ、マシコ、ツグミ、カワアイサ、幾種類かのシギを見ることができ、心のはずむような一日でした。

ウトナイ湖早春

豊島博男

沖かけて白鳥舞いたつとき開げた大きな翼の白がまぶしい
白鳥の水先案内するようにヒドリガモ混りすいすい泳ぐ
白鳥が群れて泳ぐ湖辺に立ち双眼鏡でじっと眺めている
泳ぎあきた白鳥の子が岸離れた浮氷に乗って大きく羽搏く
氷解けた湖に白鳥群れ泳ぐを来て実際に見て満足す
撃墜された戦斗機のようヒシクイが尻逆立てて水潜ぐるさま
このようなことは滅多にないという同じ樹に二羽尾白鷲とまる
小さな蕾ぎっしりつけたサボテンを二鉢買ってウトナイ湖を立つ

（三月二十八日、日曜日、ウトナイ湖探鳥会にて、始めて白鳥の群れ泳ぐさまと、尾白鷲の野生の勇姿を観る）

ミスター・キユウイ

―― ウエスター・スコーブ氏の来道 ――

野　村　梧　郎

キユウイという題名にしたが、この雑文はニユージーランドだけに住んでいるキユウイの記録ではない。

英国の旧植民地の人々には、たとえばアメリカ合衆国の人をヤンキーというように、それぞれの国によってニックネームがついている。この例にならってニユージーランドの人は、この国だけに住んでいて、国鳥にもなっているキユウイの名をもじって、他の英連邦の人々にキユウイとよばれているとのことである。

私にこの話をしてくれたニユージーランドのオタゴ大学で自然保護・鳥類学の教授をしているミスターウエスター・スコーブ、つまりミスターキユウイ氏は、4月1日夜8時53分札幌駅着の列車で、片手に重量20キログラムの大型スーツケース、片手に書類ではちきれそうなズッシリと重い鞄をさげてさっそうと降りて来た。

ときまさに役所の年度がわり、なにかと多忙な毎日を送っているうえに、今年こそおおいに内容の充実した行事をと張り切っていた愛鳥週間が目前に迫っている。そのうえなににもまして言葉が通じない。まったく日本語がわからないミスターキユウイと握手しながら私は急にゆううつになった。

砂　の　山

ミスターキユウイはキジの世界的な権威者で1年がかりで、世界のキジの主要生息地を調査する途中本道に立ち寄ったのだが、4月5・6日、日高の浦河町に調査に行くことになった。北大の阿部先生が同行されたので言葉の心配はない。まづは地元の人の案内で山に入ることにした。

ブッシュをかきわけながら小1時間、キジのひそんでいそうな場所を探し歩いて下山したとき、ミスターキユウイは山の中で拾った小砂利を10数粒にぎりしめていた。ミスターキユウイは、この山はキジの生息環境として最高の条件を備えていて、特にこの砂利が有益だという。いつぱんに植物食の鳥は、小砂利や砂のようなものを食物と一諸についばんでいないと充分な消化作用を行なうことができない。ニユージーランドではこの砂が少なく、キジが道路に出て砂をついばむこともあり、時には砂の有無がキジの分布を制限することさえあるという。後日上川管内の調査の帰途、砂利採取場の砂の山を見て溜息をついたミスターキユウイの真剣な表情に、惻隠の情さえ感じたほどだった。

ポーチヤード

どうせ満足に言葉が通じはしないが、せめて鳥の名前だけでもと4月の上旬、のこの時期に、目にふれそうな種類をいくつか頭にいれておいた。ミスターキユウイは北欧と北米でも研究生活を送つたとのことで、当然のことながら判別力はすぐれており、なによりも目が早い。

ミスターキユウイの目の早いのに感心しながら、走行中の車の中で数年前、雪どけの早い流れの川岸にブラインドを張りスズガモを写したときのことを思い出していた。早い流れの青い水に浮ぶスズガモの目の色を思い浮べた時、ダツク（カモ）と肩をたたかれた。前方教10メートルの小川・国道の橋のすぐ下にホシハジロが2羽いた。タイミングが悪く反射的にスコープ（スズガモ）といつてしまつた。ミスターキユウイはポーチヤード（ホシハジロ）と訂正しながら図鑑を繰つてみせる。図鑑のホシハジロの茶とスズガモの黒茶色の頭を見くらべながら、ニユージーランドと日本遠く離れた国の人間の間に野鳥を通じて流れる共感を感じ、私はミスターキユウイに親近感を覚え始めていた。

ノ　ー　ト

キユウイはニユージーランドにだけ生息する飛べない鳥で、翼は完全に退化している。体の大きさはニワトリ位で夜行性、地中に長いクチバシをさしこみミミズ等を食物にしている。キーウイーと聞える鳴声がこの名の由来という。ニユージーランドの国鳥。

野　鳥　雑　感

札幌市　羽　田　恭　子

一席（石）二鳥

一石の石（セキ）は、石（イシ）という物騒な字を書きますが、去年7月5日、愛護会で、ウトナイ湖畔に、探鳥に行つてから私は断然、一席二鳥と書くことに改めました。あら、この人、誤字を書いているわ、と、いわれてもよいのです。

葦が、風に揺らぐまゝ、その葦に身を委ね、いつまでもいつまでも、喉を震わせて、美声を聞かせてくれたコヨシキリ。身軽で、スマートなハクセキレイ。黒い頭でさつと草原を横切つたオオジュリン。唱歌には、ピイピイと、囀るヒバリ、とあるけれど、あの大草原で聞くともっともっと繊細で、美しく聞こえるヒバリの声。ノビタキ。アオジ。遠くでカツコウの声など。草原の鳥を思う存分堪能して、空を見上げれば、優雅なアオサギの舞おなじみトビの帆翔、V字型のチユウヒの滑翔など。そして湖畔にでれば、湖面を渡る風は涼しく、すぐ足もとで、イソシギが、体で調子をとりながら、無心に餌を、ついばんでいる姿に、思わず感嘆の声をあげ、遠くから聞える水鳥の声に耳を傾けました。

「あ、いる、いる、GIカツトのアカエリカイツブリだ。」

の声に、双眼鏡で、遙か葦の彼方の湖面を見ましたが、残念なことに、声はすれども姿は見えず。なのです。他の人に見えて、どうして私に見えないのかしら。その時気が付いたのです。カイツブリは、葦のすぐ向こう側にいるために、背の低い私には、葦と双眼鏡が水平になって見えないのです。

「いや、ジスプレイだ。面白い。面白い」

という仲間の歓声をよそに、今度、こんな処へ来る時はどうしても折りたたみ式の椅子を持つて来よう。そうしたら脚立のかわりにもなるし、汽車が混んでいれば（あの日、帰りの汽車は少々混んでいました。）椅子のかわりにもなる。これが本当の一席二鳥だ。それ以来、私の心の中で、一石二鳥は、一席二鳥に、かわってしまったのです。

最高の贅沢

野鳥愛護会の探鳥会だけでは、たりない思いで、もっと多くの機会がないかしらと、思つていた折、野鳥だより3号で、百武さんのお誘いがあり、月一回の野幌探鳥に、飛び立つ思いで応じました。

〝百武学校の生徒〟これは、私が勝手につけた名前です。それにしては、出来の悪い生徒ねえー。先生が御立派だというのにー。こんな声が聞えて来そうですが、とにかく、喜び勇んで参加しました。

9月の1回目は、百武さん御夫妻の他に、生徒が3人。5人で歩きました。人数が少なくても、いや、少なければ少ない程、指導を受ける側からすると、まさに、〝最高の贅沢〟ということになると思います。この日は快晴で、20種以上の鳥を見ることができました。1人では、なかなか見つけられないのに、百武さんは、針葉樹の先が、ちょっと揺れたかと思うと、「あそこにシメがいる」と、早くも見つけられるのです。私なら風で動いた、としかみえないのに。一体、どんな目の、耳の、いや、心の構造になっていられるのかしらと、唯々感嘆するばかりです。きっと、鳥の心を知り、野鳥と話の交わせる数少ない方の、お1人なのでしよう。ぬけるような青空にハイタカが滑翔し、下面の横縞が、はっきりと見れたのには、感謝しました。

道端の、キツリフネ草の黄色い花、サラシナショウマの白いふわふわ、また、ヒメジョオンの素朴な味わいも静かな散歩道に風情を添えていました。

10月も快晴に恵まれて、この日も20種程見ることができました。中でも、エナガの、白い頭、長い尾、ポツンと小さな黒い目が、双眼鏡でみると、とても可愛く、あんな小さな瞳にも、表情があるように見えました。

11月は、渡りの途中のツグミ、ムクドリの群れを多く見かけました。「どうか、無事に渡つておくれ、カスミ網になんて、かゝるんでないよ。」こんな思いで、次々に表れる、ツグミの群れを見送りました。また、脚をいためたビンズイが、折からのみぞれの中で、そぼ濡れているのが、あわれでした。この日は寒い日でしたが、帰りには、ルリビタキを思う存分見れたのは、大収穫でした。

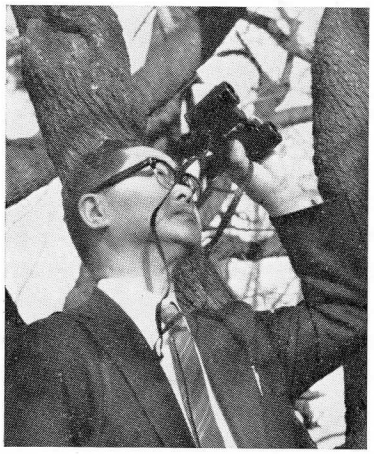
ウバユリの蕚果が、ひっそりと立ち、クマザサが、かさこそと音をたて、あれほど緑を誇った森林も、静かに初冬の厳しさに耐えようとしていました。

12月は、もう雪が、4・50センチも積もり、すっかり冬景色になった野幌。人影もない公園の中を、百武さん御夫妻はカンジキで、私はスキーで、その後ろに長靴で何人かが続くという具合でした。ひっそりとしている野幌でも足もとからキジが飛び立ち、ウソ、ヤマゲラ、大アカゲラなど、やはり20種近くは見れるのです。キクイタダキの、今にも風に吹き飛ばされそうな可憐な風情も印象的でした。

自然は、こちらから訪ねれば、こんな雪の中でも、私共を歓迎してくれたのです。

野鳥保護で知事表彰

（野鳥観察が唯一の楽しみという
佐々木勇さん…小樽水源地で）



道林務部では、昭和46年度の愛鳥週間を迎ふるにあたって、野鳥保護に功績のあった個人、団体の知事表彰を行なうことになり、5月8日午後1時から自治会館において表彰式を行なう。

今回の受賞者は1団体、4個人で、野鳥保護の普及指導や、野鳥の救護に功績のあつた人たちである。

■ 浦河鳥獣保護センター

この施設は、猟友会浦河支部が設置したもので、当初はコウライキジの養殖を目的としていた。ところが、日高地方にはとくに野生の鳥獣が豊富で、その中で、傷病やえさ不足によって、救護を要する鳥獣も多く、こうした鳥獣を収容する施設のないところから、キジの養殖場に持ちこまれることが多く、支部長の三島さんが中心となり、野生鳥獣の保護施設として改装スタートしたものである。

すでに10数羽の白鳥を救護し、健康を回復させて放鳥し、さらに市街地に迷い出て野犬に傷つけられたエゾシカを保護するなど、鳥獣関係者から感謝されている。

■ 佐々木勇さん

佐々木さんが野鳥に関心を持つようになったのは学生の頃からである。その後、日本野鳥の会の中西悟堂さん等とも親交があり、昭和10年に日本野鳥の会小樽支部を発足させた。以来35年間にわたって会の中心的役割りを果しており、本道の野鳥保護運動の創生期における第一人者である。

小樽子供動物園も佐々木さんが育てあげたもので、実質は佐々木さんが園長さんのようなもの。また小樽水源地を鳥獣保護区として、コウライキジ、コジュケイを放鳥したり、その功績も多い。小樽市内で親の代からの鉄砲火薬商を営んでいるが、狩猟をしない狩猟者でもある。（71才）

■ 畠山周治さん

畠山さんは、昨年の春までは旭川市郊外の台場小学校の校長先生であつた。台場小学校は小鳥の学校として有名で、昭和42年には農林大臣、文部大臣の両賞を受賞している。畠山さんが台場小学校に赴任したのは昭和39年学校が管理している小鳥の村に巣箱をかけたり、観察記録を作成したり、給餌施設を作ったり、全校あげての実践活動が実を結んだもので、退職後は道の鳥獣保護員として、市内小中学校の野鳥保護指導や、鳥獣保護区の管理に努力している。旭川市旭神町（61才）

■ 久万田国雄さん・脇田勝之進さん

久万田さんは網走市内の時計屋さんで50才、脇田さんは江差町の会社員で65才、いずれも私設野鳥病院の院長さんである。網走や檜山地方で、救護を要する鳥獣を引きとっては、昼夜をわかたず、せっせと介抱してはまた自然のもとへ帰してやる。口のきけない野鳥だけに、その疾病の原因を発見することは容易ではない。しかも、なんの見かえりもない一方的な奉仕である。やさしい院長さん達である。

■ 農林大臣賞に井上さん

5月12日、盛岡市で開催の「全国野鳥保護の集い」で野鳥保護功労者の中央表彰が行なわれるが、この席上で本会の井上副会長が晴れの農林大臣賞を受賞する。また白鳥の保護で名高い別海町野付中学校と、狩猟取締りに活躍した室蘭警察署が村野庁長官と、日本鳥類保護連盟理事長賞を受ける。

（昭和45年度の表彰式）

探鳥会のノートから

江別市　百　武　千恵子

◇亡びゆくアオサギ

愛護会が発足してから、早いものでもう1年がすぎました。何回かの探鳥会を皆さんと楽しんで参りましたが、私の心にもっとも強く焼き付いているのは、残念なことにその中でいちばん楽しくない情景なのです。

昨年の7月5日、機会を得て私たちは苫小牧市内に残されたアオサギのコロニーを見ました。保存に努力された方にはお気の毒ですが、そのコロニーのありさまは、まさに無惨というほかないものでした。すぐ足元まで埋立てられ、わずかに残された島のような木立が有刺鉄線で囲われています。アオサギはその木々の梢に巣をつくっていました。

渇き切った埋立地に倉庫や工場の建つ日も遠くないのだそうです。コンクリートの建物がたち並び、土埃をあげてトラックがゆきゝするすぐそばで、アオサギは巣をつくり生活してゆくことができるでしょうか。たとえアオサギにそうした環境に耐え抜く力があったとしても、全くの原野であったそのあたりが、埋立てられたことによって、微妙にいりくんだ自然のバランスがくづれ、アオサギの生活に必要な水や餌が失われることも充分考えられます。

辛うじて孤塁を守っているといった情景を見て、私はこのコロニーが滅びるのももはや時間の問題だと感じたのでした。埋立てそのものがアオサギには致命的だったのです。重い気持で踏んだ砂地にヘラオオバコがへばりつくようにはえていたのを今も思い出します。

◇野鳥保護に理論と行動を

それ以来私は、以前から持っていた「愛護会をただ鳥の生活を楽しむだけのものにしたくない」という考えを一層深くしました。もちろん鳥の名を知り、その姿や声になじみ、いきいきした暮しぶりを眺めて楽しむことは充分に意味のあることに違いありません。愛護会の当面のあり方はそんな風であってよいと思いますが、しかし将来もそれだけのものには終らせたくないのです。あのアオサギたちの様子が記憶にあるかぎり、私は安閑と鳥たちの生活をのぞかせてもらっていていゝのだろうか、という疑いを抱かずにはいられなくなりました。

この問題については、ほんの少し考えてみただけでもどんなに難しいことであるかがわかります。たとえばいまアオサギのために水を確保したいと考えたとします。すると私たちはすぐに工業用水や農薬の問題につき当ります。さらにまた、開発や自然保護について検討しなければなりません。餌について考えても農薬の害が直接ひびいてくることがわかります。埼玉県にある野田のサギ山では、6年間にサギの巣の数が10分の1に減ったと報告されました。これは水の汚れ、餌に蓄積された農薬の影響、巣をつくる環境の悪化などが原因とされています

◇野生の生物の価値を考える

さて、こう書いてくると、いや自分はただ鳥を可愛がりたいだけで、そういう難しいことは立場を別にする人たちが扱う問題だと云いたい方もあるように思います。あくまでも趣味として鳥に親しみたいという考え方は、それなりに意味はあります。鳥たちのために巣箱をかけ餌をしたくする――もちろん必要な心あたゝまることです。また餌づけをするのもほんとうに楽しみなものでしょう。それにくらべると先にのべたような問題はたしかに大きすぎ、政治的ですらあると感じられるかもしれません。でもちよっと考えてみて下さい。いまの日本ではもうそこから検討し直さなければ、鳥たちの生命をあるがまゝに生かしてゆくことが難しくなってきているのではないでしょうか。野生の生物の価値はその生物が野生のままに生きているというところにあると私は考えます鳥たちがこの世にあることの価値、その楽しさをいくらかでも知り得た私たちは、愛護会の組織を力あるものに育て、そういった問題についての資料を提供したり意見をのべたり、また世論に働きかけたりすることができるようにしてゆきたいものです。

◇星の生物の一員として

宇宙の中の1つの星としての地球を考えるとき、それはなんと美しく愛すべき星であることでしょう。そのまわりをちようどミューズの額を飾る冠のように、渡り鳥の帯がとりまいている様子を私はしばしばおもい描きます。その帯をつくる一羽一羽の胸にあたたかい血が脈搏っていると思うと、私はいつも名状しがたい感動に浸されてしまいます。この星の上の生物の一員として、私はその帯を失つてはならない仲間たちの一つだと信じています。

給餌台と野鳥たち

京大北海道演習林　吉村健次郎

野鳥愛護などという殊勝な気持ではなく、多分にヤジ馬的心理で、まえまえから給餌台をおいてみようと思っていた。昨秋事務室の窓のそばのエゾマユミに、シジュウガラが来ているのを見て、その赤い実が落ちてしまわないうちにと、11月はじめマユミの枝と、そこから3m程はなれた所に丸太を立てて、その上に30cm角程の板をのせた簡単な台をつけた。マユミの木は窓から5m程しか離れていないので、職員が毎日飯やパン、果物、魚の骨など残り物をのせているが、最近ブタ脂も金網につつんでつるしている。窓のすぐそばなので仕事の合間に見ているといろんなことが分る。

はじめから早速に、えんりょなくごちそうにありついているのがミヤマカケス、はじめは2羽づつふたつがいが午前は10時から10時半頃、午後は3時から3時半頃と大体時間が決まっていて、またお互いに追いはらったり、時間をずらしたり、けん制しあっていたのが、次第に数が増えて5羽、6羽となり、今では8羽から10羽位集まって来ている。そうなると席のあくのを待っていたのでは間に合わなくなり、小さなマユミの木に餌台をかこんで4羽も5羽もとまつでいるのが見られるようになつた。これはほんらい単独行動をたて前として、テリトリーのやかましいツキノワグマなどでも冬眠前採餌量が多い時期には、餌の多い所に集まつているのと同じ現象だろうと思う。

ミヤマカケスと共に、はじめから来ているのが、それ以前からマユミやその横のトドマツを本拠にしていたゴジュウカラとコガラ。そして年があけて雪が多くなるとシジュウカラの夫婦とヒガラが仲間入りし、この1週間のうちにエゾアカゲラのメスが毎日やつて来るのと、キバシリが一度姿を見せていた。

前に書いたように、はじめは小鳥達の食事時間がほぼ決まつていたのに、こう大家族になると、間に合わないのか1日中来ているようになつた。いま餌台を次第に窓の方に寄せる実験をしているが、3mと2mに寄せたら初日はちょつと寄りつかなかつたが、2日目から餌台につくようになつた。

これから季節によつてどんな鳥がやつて来るか楽しみである。それと不思議とカラスとスズメが来ない。カラスやスズメも同じ野鳥だが、給餌台に来ないようにと願うのは人間の勝手だろうか。

ともかく窓の外でくりひろげられる野鳥達の生態は見あきない。（標茶町）

写真説明

上）京大演習林鳥獣保護区内のエゾライチョウのオス

下）演習林構内のエゾマユミの餌台に来たミヤマカケス

オオハクチョウ雑感

根室市　三　品　忠太郎

根室地方には、いくつかの自然がまだ残されているがゆたかな自然を代表するもののひとつに、優雅なオオハクチョウがある。

白鳥の救護活動が全国に報道されてから、宮城県の中学校が総ぐるみでトウモロコシ、シイナ等を大きなダンボール箱に7個も送つてきた。東京都の主婦が、えさ代の一部にと現金5000円を送つてくれた。

地元の仕出し料理店、喫茶店から、パン屑を多量に届けていただいた。毎年この季節になると、みんな白鳥のことを考えてくれる。昨年は遠く兵庫県をはじめ、道外10件道内11件にもおよんでいる。

給餌のために手配したエン麦とともに、春別川河口に住む鳥獣保護員、高橋さん宅の物置には、これら善意の品々ではちきれそうになる。

☆　☆　☆

その数2万とも称され、冬のオホーツクに景観をそえている白鳥は、昭和45年12月5日には5,400羽余で、前年44年には11,800羽余の飛来が確認されている。また全国一斉の調査が行なわれた45年1月には5,184羽、今年の1月には、折からの低気圧の襲来で、交通途絶による難行を重ね、別海村野付湾に4,200羽、春別川河口1,500羽など、合計5,746羽が確認されている。

しかし、春別川河口の越冬風景も、昭和39年にこの地が鳥獣保護区に設定されてからで、それ以前は、人間を信用しない彼等は、沖合遠くにいて、岸には寄つてこなかつた由である。

昭和42年の寒波襲来時には、危険をおかしての氷割り作業や、保護収容作業を実施してきたほか、平素から注がれた愛情が白鳥に通じ、大人には警戒して近づかない彼等が子供のさしのべる手から、直接餌をとるようになり、それ以来どんどん人間に近づいているのである。

☆　☆　☆

昨年の冬は、保護収容28羽、死亡58羽、計86羽に止めることができほつとしている。しかし、この冬の食糧難は、人との結びつきを一層深めている。尾岱沼の漁家の家へ、朝早くから20羽ほどの白鳥が、窓のところへ餌をねだる風景がみられた。

すつかり人間を信用してしまつた彼等が、大きな尻をふりふり、餌を求めて上陸してきたのである。

「とても、ゆつくり寝ていられないよ」

と苦笑しながら話してくれた地民の人たちの顔には、なんら迷惑そうな影も感じられなかつた。

昨年の春に、道費で完成した白鳥保護センターに、保護収容された白鳥に、コウライキジ用の足環をつけて放鳥したところ、今回の一斉調査で舞い戻つているのを発見した。さすがにものおじせず、最前列でえさをねだつている。

むかし何かの本で読んだ野生のけものが、人間に飼育されたけものを軽べつして、相手にしないとの話しはどうも疑わしいと思われる。

☆　☆　☆

ところが、宮城県の伊豆沼における漁民の粗暴な行動青森県小川原湖、弘前市、本道でも苫小牧市における惨殺行為など、ハンターの悪質な行動が目に余る。

白鳥は孤独な鳥ではない。いつでも人間との交歓を望んでいる。しかし白鳥を裏切り、彼等を孤独な氷原にとじこめているのは、むしろ人間たちの罪である。

最近、白鳥を本州の大湖水に移動させようという人々の構想がある。白鳥は根室だけの鳥ではないのだから、広く全国の湖沼に渡ることは望ましいことである。しかし、白鳥が道東を選んで渡りをする理由は、無謀なハンターの銃口を避け、汚染されない空気と、澄んだ水、豊富な藻を求めてのことである。

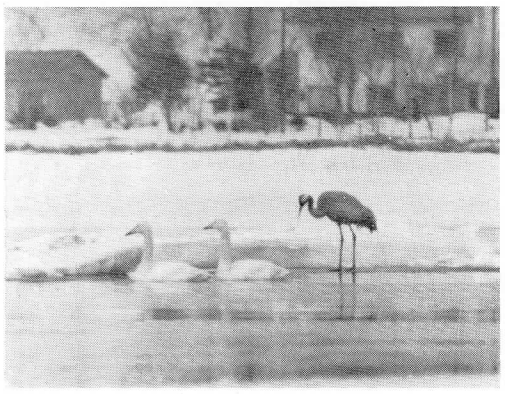
こうした条件をみたさないで、人工的に白鳥を分散させようとしても無理なことである。白鳥たちの死との激しい斗かいを目のあたりに感じながら、道東の人々は抜本的な保護対策の講じられる日を、1日千秋の思いで待つている。

（根室支庁林務係長）

探鳥会のお知らせ

5月10日からの愛鳥週間を迎えて、例により探鳥会を開催します。全員の皆さんに参加を願います。

1. 場　所　野幌森林公園
2. 日　時　5月9日午前7時～午後1時
3. 参加の方法　バスを運行しますので、事務局まであらかじめ予約願います。



トーフツ湖のクロヅル

網走市　玉　田　　誠

3月20日の夕方、いつものとおり白鳥に投餌をしているとき、300m ほど彼方の氷上に、大形の鳥が1羽降りるのを見ました。白鳥とは違うような気がしましたが、そばでわめきたてる白鳥に気をとられて、ツルだと確認したのはずっとあとのことでした。そのときは種類までわかりませんでした。

その後、小生のみでも5日間も確認しています。上掲の写真は24日の朝写したもので、クロヅルだと思つております。

クロヅルの便り

網走市　大　西　重　利

3月18日、鳥獣保護区の巡視に参りましたところ、山の中央部に古い川の流れがあり、50米巾で、3粁ぐらい融けている場所があり、白鳥の群の中に、アオサギに似た鳥を見ました。どう見てもアオサギではなく、スキーがなくて近づけないまま、心を残して帰りました。

ところが、4・5日風邪で寝込んでいたら、NHKから電話があり、クロヅルが来ているらしいが確認したかと問い合わせがありました。

24日は午前中曇であつたので、午後から出かけましたが、100米位しか近寄れず、色も確認できないまま、対岸に迂回したところ、沢の奥の方から、高度80米位で頭上を通過し、灰色の姿を確認しました。

翌25日は朝9時頃から出かけ、100米位のところから10米位近寄るごとに写真をとりました。頭頂からあごにかけて黒く、目の後から首にかけて白色があり、体は淡いねずみ灰色で、頭頂の丹は確認できませんでしたが、立っているときは黒く見えるので、「クロヅル」に間違いないと思います。

山階鳥類研究所にも一応報告しましたが、3月31日には支庁林務課の人々と立ち合いで、保護をしていたオオハクチョウを1羽放鳥しました。そのときもクロヅルが1羽、最初の発見地に居ました。

カ　ラ　ス

芦別市　定　　茂

住宅地に近い樹林地帯を、20年近くも〝ねぐら〟に利用していたカラスどもも、近年は公害論争？の対象となり、その住家が脅かされることになつたが、さて？

本年の2月に、地域住民から「安眠妨害」「子供の勉強に支障」「病人の精神を高ぶらせる」など、平常の生活に影響をおよぼすということで、駆除を講じてほしいという要請が出された。

そこで市はハンターを動員して、駆除に乗り出したがなにしろカラスの数が約5,000羽、しかも〝ねぐら〟へもどるのが日没時刻の30分あと、それから木の枝に落着くまで1時間を要するので始末が悪い。

日没以前では飛び回っているカラスが多く、あちらこちらと移動しているので、どこで攻撃をかければよいのか迷ってしまう。よしんば固まっていそうなところを狙っても、西で撃てば東へ、東で撃てば西へと、逃げられっぱなしで戦果はゼロ。

〝ねぐら〟は法律の16条でままならず、さて皆さん。カラス駆除の名案をお持ちの方はご教示願いたいところである。

道東の野鳥の紹介を

東京都　畠中妙子

「野鳥だより」いつも嬉しく拝読しております。いつか、釧路―網走を結ぶ線の東側の地区の野鳥の記録ができましたら、紹介していただきたく存じます。

昨日、日本野鳥の会東京支部の、柳沢幹事さん方の指導で、大島までの海路を征服しましたが、コアホウドリの遠姿を教えていただきました。荒れた海がすばらしく美しく感じました。

住居付近には、ムクドリ、オナガ、ヒヨドリ、シジュウカラ、たまにジョウビタキ、カワラヒワが来ます。シジュウカラは、スズメと共にとてもふえている感じです

皆さまの健康を祈ります。（3月8日）

（脂肉に乗つたツグミ・萩千夏さん撮影）

北海道の代表獣を

北海道を代表するにふさわしい野生獣を選んで下さい。

投票される方は官製ハガキ、または支庁林務課に投票用紙をそなえつけてありますので、次の3種の中から、自分の選んだ種名を書いて住所、氏名を明記して投票願います。

1. 候補獣

ヒグマ　アジア・ヨーロツパ・北アメリカなどに広く分布する北方系の猛獣で、日本では本道だけに生息し、キムンカムイと呼ばれ先住民族の時代からなじみ深い。

エゾシカ　日本列島各地に生息するニホンジカのうち、もっとも北方に生息する一亜種で、とくに体格が大きく気品のあることで知られている。

シマリス　日本では本道だけに生息するリスで、背中に5本のたてじまがあり、愛敬のある行動と人を恐れない性格でとくに親しまれている。

2. 投票の締切り　昭和46年5月31日

3. 送付先　札幌市北3条西6丁目
北海道林務部林政課

＜行事日誌＞

◇　3月28日、苫小牧市ウトナイ湖で探鳥会を実施しましたが、参加された小笠原照子さんから別記のとおり原稿をいただきました。期待していた以上の収穫に、皆さんに満足いただけたようです。

◇　4月24日、午後1時から林業会館で幹事会を開き第1回の定時総会にむけての対策を協議しました。決算報告、予算案、事業計画などを寝議し、総会を5月8日午後1時30分から自治会館で開催することになりました。

＜事務局だより＞

○　北海道野鳥愛護会も、創立から1周年を迎え会報の発行も第6号となりました。この間ご協力いただいた会員ならびに役員の皆さんには、本当にご苦労様でした。

○　この2・3年の間に、自然保護行政は目まぐるしく動いております。国では環境庁を7月に発足させるかまえですし、道でも環境部を設置することを知事は公約しております。自然保護行政といっても、究極は野生鳥獣の保護に通じるものと思います。